

医療DX(デジタルトランスフォーメーション)が もたらす未来

茨城県保険医協会理事 石橋 正二郎

医療DX(デジタルトランスフォーメーション)は、医療分野においてデジタル技術を導入し、患者ケアや医療サービスの向上、効率化を図るための取り組みを指します。デジタル化と言えば、現在、マイナ保険証、オンライン資格確認の導入で躓いている現状がありますが、今回は医療DXのもたらす未来(メリット)について考察したいと思います。

確かに医療DXには課題もあります。データのセキュリティやプライバシーの問題、利用者のデジタルリテラシーの向上が求められることなどが挙げられます。これらの課題に対処するためには、適切な法的規制やガイドラインの整備、利用者教育の強化が必要でしょう。しかし、医療DXにはこれらの課題をも凌駕する多くのメリットがあります。

現在の医療データは、各施設毎にスタンドアロンで管理されている状況ですが、これがクラウドで管理されるようになったときに真価を発揮すると思われる(医療機関ではクラウド上の患者データをビューワーで見に行く形になります)。その活用の仕方には、縦断的(経時的)活用と横断的(共有的)活用の2種類があると思います。

縦断的活用とは、「ゆりかごから墓場まで」の個人データをクラウド上で管理することです。医療機関のデータのみならず健康診断データ、家庭での血圧、血糖値、更にはウェアラブルデバイスから得られるバイオメトリクスのトラッキングデータ(体温、呼吸数、運動、睡眠の質、ストレス度等)は、リスク識別や予防策の提案、病気の早期発見に役立ちます。例えば、アップルウォッチによる心房細動検出率は、今やホルター心電図に勝り、その発見に貢献している現状があります。画像データ、血液検査値、服薬データの経時的なクラウド管理は悪性腫瘍や薬剤性肝・腎障害などの早期発見も可能でしょう。更にクラウド上にデータがあればバックグラウンドでのAI診断も可能となり、病気の可能性があるときには医療機関を受診せずとも個人のスマホへアラート通知もできるでしょう。

横断的活用とは、医療機関間での患者情報の共有です。例えば、夜間、自院の患者が急病で他院救急を受診した際に、その患者の現症、既往歴、アレルギー歴、内服歴など救急担当医が事細かに問診することが必要になります。意識があればまだ良いのですが、コンタクトの悪い状況では治療方針を立てるのに難渋します。昼間であっても患者の診療内容の照会は、まだ紙ベース(ファックス)で非常に時間がかかっているのが現状です。診療データがクラウド上にあれば診療履歴を参照することが可能となり、上記問題の多くが解決できることでしょう。また直近の検査データがあれば過剰な検査を回避することができ医療費の削減にもつながるでしょう。

日本産業のデジタル化は諸外国と比べ遅れており、特に行政サービス、教育、医療・介護の領域は遅れが目立ちます。医療データは健康に関する極めて機微な個人情報であるため、セキュリティ対策、法令・ガイドラインへの対応などの課題があります。しかし、医療DXのもたらす利益は多大なものがあるため、その推進に努めていこうではありませんか。